

## 黒木龍三先生の人と学問

—— 座談会 クールヘッドとウォームハート ——

日 時：2019年6月15日（土） 15時～18時

場 所：立教大学 セントポール会館

出席者：平井 俊顕（ケインズ学会会長・上智大学名誉教授）

浅田統一郎（中央大学経済学部教授）

野下 保利（国土館大学政経学部教授）

黒木 龍三（立教大学名誉教授）

以上4名

### 1. はじめに

黒木 本日は、貴重なお時間を割いて座談会にご出席賜り、厚く御礼申し上げます。3人の先生に、初めに、なぜ学生時代に経済学の研究の道を選んだかということで、学部生時代の思い出から始めて、続けて大学院時代にどういった研究に集中されたかということをお伺いします。続いて、まずは私と浅田さんとの出会いだとか、それからニュースクール（注：ニューヨークにある、New School for Social Research）で野下さんと初めて出会った頃の思い出などを話しあって行きたいと思います。1990年代のバブル崩壊を受けて、特に浅田さんや私はミンスキーの理論がぴったり当てはまるのではないかということ、私は私の立場で考え、浅田さんは浅田さんの立場から研究されて来たので、そのあたりの経緯などをお話してください。

ニュースクールから日本に帰ってきて、浅田さんと私は、マクロと金融の関連という視点から、今お話ししたミンスキーの不安定性理論の深掘り、という方向で研究を進めてきたのですが、それに対して、野下さんはどの

ようなスタンスを取られていたのか、お伺いできたらと思います。さらには、マルクス経済学の研究に没頭していた頃の思い出、とか、今、それをどう考えたらいいかなど。また、高須賀義博先生の思い出や影響について、われわれの共通項は高須賀先生ですから、少しお話ししていただきたいと思います。マルクス経済学に関しては、当時、東大は、ある意味、マルクス経済学の牙城だったので、平井さんには東大時代の思い出を語ってください。

後半では、せっかくケインズ学会会長の平井さんに来ていただいているので、世界経済的な観点、歴史的な観点、さらには現状を踏まえて、経済学の可能性について語りあいたいと思います。それから、経済学の取り組むべき課題や今後の展望、経済学教育の意義、あるいは場合によっては憂慮などについても思うところをお話ししていただきたい。とにかく今日は、それぞれの立場で自由に語り合いましょう。

### 2. 経済学事始め

黒木 私から口火を切らせていただきます。私が早稲田大学に入学したのが1972年。1970

年の安保闘争は、東大紛争やベトナム反戦運動などがあって盛り上がりましたが、一方で、だんだん学生運動全体が収束、沈静化し始めた頃でもありました。

私が早稲田を目指した理由の一つは、高校生のときに、早熟というか、当時話題になった西川潤先生の『飢えの構造』を読んで、是非、西川先生のところで学んでみたいと思ったことですね。今後は、東西対立ではなく、南北問題だ、先進国による低開発国の搾取だと。当時は、開発・発展の遅れた国々を後進国とか低開発国とか呼んでいました。結局、早稲田の政経に入学して、西川ゼミに入れてもらえましたが、当時、先生は若かったせいもあったのか、非常に張り切っておられて、いきなり原書を読ませ、学部のゼミなのに日本語の本は一切使わない。今思うと、とんでもなく厳しいゼミでした。ゼミ自体は3年からでしたが、私はすでに1年生のときから外書講読の授業で西川潤先生にはずっとお世話になっていて、その頃の思い出を少しお話ししましょう。当時の早稲田は内ゲバがひどくて、その象徴が川口君事件でした。川口大三郎君という文学部の学生が、内ゲバで殺されたんです。それでノンボリの一般学生まで騒ぎ出しました。早稲田は、あるセクトに牛耳られていて、大学当局も飼犬みたいな感じで、自治会費や学園祭費などの名目でお金も流していた。

浅田 極左セクト同士の対立で、それに巻き込まれて川口君が殺されちゃったという事件。

黒木 それで大学を牛耳っているセクトの連中を追い出そうということで、一般学生を中心に全学運動が起こった。政経の場合は、自治会が事実上なかったのに、過激派のセクトが僭称（せんしょう）していたので、そんなことは許せんということで。私はまだ1年に入ったばかりでしたが、クラスの代表になって、結局、自治会の副委員長に選出されて

しまっただ変だったんです。もう、対立する過激派には狙われるし、試験も受けられないし、ということで。大学に行ったらゲバ棒が待っていますから。そんな中、「こういう状況なので試験、教室で受けられないんですが」と西川先生に訴えたら、「君の試験は私の研究室で受けていいから」と仰って、特別に研究室に呼ばれて受けさせてもらいました。研究室には、殺されたチリのアジェンダ大統領と一緒に写った写真が飾ってありました。このときの先生との思い出は、いまだに宝物ですね。政経の教授陣をキャンパスに引きずり出して、自治会再建のためにつるし上げ団交も行いましたが、西川先生はページのトレんチコートに身を包み、颯爽としておられたのがとても眩しかった。

平井 浅間山荘はもっと後？

浅田 浅間山荘の事件のほうが前（注：1972年2月）。浅間山荘事件は僕が高校生のときにあった。

平井 私は大学院で、街の食堂のテレビを見ていました。

野下 私はもうどうしようかなと。勉強しなきゃいけないが、面白いから。

浅田 もうちょっと言うと、ニュースにもなったが、あの赤軍派の連中が仲間を次々に殺して山奥に埋めたでしょう。それで、殺されて埋められた中に、僕の卒業した東海高校の先輩がいたんだ。殺されて埋められてしまっていた。

黒木 こんな事件もあって、この頃、学生運動全体はもう終息に向かっていたんです。とにかく混乱期だった。

浅田 結局、自滅した。仲間内で殺し合いを始めて、世間の支持が得られなくなって、自滅したんだ。

平井 学生運動があれば自壊しちゃったんですよね。

黒木 ただ、その後もセクト同士の争いが一部の大学では続いていて、そうした中で川

口君が殺されてしまったのです。

浅田 その後もね。だから、実は「昔は良かった」なんていうのは嘘っぱちで、とんでもないでたらめな時代だったんですよ。

黒木 とんでもない時代。本当におっしゃるとおりで。秋田明大、とかいう、当時の闘士が、朝日ジャーナルに「我々の闘争はお祭り、みたいなもんだったんですよ」と書いていたのを読んで、がっかりしたというか、怒りが込み上げてきたのを憶えています。われわれは何のために真剣に学園闘争に参加したのだろう、共感したのだろう、と。

平井 皆さんの世代よりも、私の場合はもっと状況がひどかったですから。後でお話ししますが。

黒木 川口君が殺された事件を経て大学の自治会再建運動が落ち着いたところで、私はゼミに没頭するようになりました。西川先生は、世界経済は、今や、東西の対立問題ではなく、南北問題であり、先進国による途上国の搾取という視点や政治的経済的自立の可能性という観点から、歴史的・現状分析的に解明されなければならない、という立場でいらした、と思います。この問題の一連の海外論文をまず原文で読まされて、はじめに知ったのは、特に南北問題の始まりが、これが面白いんですが、世界的な規模での北と南ではなくて、イタリアだったということです。イタリアの中での、発展した北部と、停滞した南部という視点の論文をまず読まされた。イタリア国内での格差が、南北問題の始まり、と。そういう古い論文から読まされて、そういう意味では随分鍛えられたと思います。理論的にも。

平井 北部リーグというイタリアの政党ね。あれがそうした状況を象徴していました。

浅田 1940年代。

黒木 40年代、50年代、その頃。

浅田 イタリア北部は割と発展していて、工業地帯で、比較的豊かなのに対して、南部

は農業地帯で比較的貧しかった。

黒木 農村しかないですからね。イタリアの農村や農業労働者の境遇を扱った『苦い米』という映画がありました。

平井 それは今でもそうです。

黒木 当時の理論的な支柱という意味では、1950年代、60年代ですが、ハーシュマンとかヌルクセなどで、ハーシュマンが不均等発展の理論で、ヌルクセが均等的な発展、つまり、それぞれの産業分野が均等に発展していくほうが望ましいという理論を展開した。その類いの論文を多数読まされました。私が名前を覚えているのは、エッカウスという人で、それぞれ生産要素の賦存状態の偏りで、つまり、資本集約的か労働集約的かで産業構造が決まっていくみたいな、そういう極めて基本的だけれど重要な論文を、学部時代に原文で読まされたわけです。その上でいきなり先生が、当時は先生というのは権力があったというか権威がありましたから、これで論文を書けというふうに、原書などをそれぞれゼミ生に渡すわけです。私に割り当てられたのは、アルジリ・エマニュエルという人の『不等価交換論』。それも原本はフランス語で、アメリカから英語の翻訳版が出たばかりでした。「これで君は卒論を書きなさい」と言われた。翻訳に追われて大変でしたね。4年生なのに、夏休みも冬休みも無かった。

浅田 西川さんはフランスのグランゼエコール、とか、だよな。

黒木 そう。パリ大学高等学術研究院。西川先生自身は、7年か8年間、フランスにずっと留学していた。

野下 エマニュエルは、フランス人だっけ？

黒木 と思うが、元々は確かギリシャ系ではなかったか。はっきりとは憶えていない。

浅田 だけど、フランスで何か活動をしていたんでしょう？

黒木 そう。学問的な活躍は、フランスが舞台。ただ、エマニュエルという人は面白く

て、というか、当時の従属理論の立役者の一人とは思いますが、フランクだとかアミンだとか、そういう連中と一緒に徒党を組んで、という感じでは必ずしもなかったのではないかと、思う。読めば分かるが、極めてアカデミックな人だと思ふ。特に、私が影響を受けたのは、マルクスの生産価格理論を南北問題に適用して、生産価格体系そのものを基にしながら、資本の国際間移動による利潤率の国際的均等化が働くことで、結果的に北の国が南を搾取している、との主張です。近年、資本は世界的に移動できるようになったが、労働は依然として国家間を越えることはできないという前提で生産価格体系を組み直して、北の資本による南からの価値移転、という搾取理論を展開した。途上国では、交易条件の現状から賃金が低く評価され、貿易をつうじての、そして低賃金を目指した北からの資本流入での搾取が可能だ、という理論。基本は、リカードウの比較生産費説だが、資本は移動できない、という仮定を外したんです。私はそうしたエマニュエルの理論構成に大いに影響を受けたわけですが、その本の中でエマニュエルが、スラッファに言及するわけです。確か、長い注の中で、本当に需要は、価格水準に影響しないんだろうか？ と、供給側だけに注目するスラッファ体系に疑問を投げかけていたのを思い出します。そのとき初めてスラッファの存在を知りました。

浅田 でも、あれは結局、マルクス経済学がベースで、日本で独自にやっていた国際価値論とかいうのと似ているんだよね。

野下 国際価値論とは逆。要するに、エマニュエルのモデルでは途上国が先進国に搾取されている。つまり、各国ごとに世界共通の生産基盤があって、生産性が一定と仮定されている。だから、南から価値が搾取されている。僕は木下悦二先生に教えてもらったが、本来の国際価値論というのは、各国で生産性が違うんだよ。それが南北問題の所得の違い

に反映されているのであって、世界市場の価格については等価交換。ただ、南の国の単位労働あたりの生産性と、先進国の単位労働あたりの生産性が違う。

浅田 生産性が高ければ、それだけ豊かになる。ただそれだけのことです。

野下 豊かになる。だから、そういう問題はあるが、先進国との所得格差というのを、単純に搾取問題にすり替えるのは、国際価値論からするとおかしい。

浅田 エマニュエルは不等価交換と言っているから、要するに等価交換じゃないわけで、労働が移動しないから、賃金格差があって、さらに比較優位が働けば、価値が移転し得る。けれど、今みたいに移民がしょっちゅう移動していたら、話は違いうだろう。

野下 問題は、ある国の生産構造、要するに国民的生産力、もしくは価値体系がそれぞれ独自であって、異なった価値体系の商品が世界市場で交換されると所得格差が生まれるというのが、国際価値論の正統的な理解かと。

黒木 日本には国際価値論争はずっと昔からあった。木下悦二さんと、名和統一さんと、赤松要さんなどによる論争。

野下 だから、国際価値論の対立は、世界を平べったい均一な構造として見て考えるか、それとも各国の価値体系がそれぞれ相対的に独立したものとして見るかの、世界経済の構造の認識の違いなんだ。異なった価値体系で生産された商品でも世界市場では同じ価格がつくので所得格差が生じる。木下悦二先生の受け売りなのだが、世界経済では価値体系を相対理論的に捉えなければならぬ、という発想は、この場合は特殊相対理論にとどまってはいるけれど、面白いと思った。

浅田 いずれにしても、そういうことをやっていたのは、当時はマルクス経済学の人たちだったのですね。

黒木 ただ、私が、日本のそういう国際価値論争にちょっと限界を感じていたのは、理

論的な展開にもう一つ展望を見出せなかったからです。それでエマニュエルの生産価格理論ののっつた理論展開の可能性に魅力を感じて、さらには、それ以降、スラッフアのほうに目が向くようになりました。

浅田 結局、日本の場合は言葉だけでやっけていて、システムがはっきりしない、方程式がない。だけど、エマニュエルなんかだと、いろいろ問題はあると思うが、とにかく何か方程式を使って言いたいことを表現しようとした。

### 3. (財) 電力中央研究所時代と大学院での研究生生活

黒木 とにかく、私は国際的な不等価交換論で卒論を書き、学部を卒業して、いったん社会に出るんです。(財) 電力中央研究所の経済研究所に研究員として採用になりました。一応、銀行や商社とかもいろいろ面接に回ったのですが、当時はオイルショックの煽りを受けてすごく就職難で、行きたかった会社は全滅でした。

浅田 電力中央研究所は原発の研究も？

黒木 いや、それについてはちょっと一言、言いたい。電中研は理系が中心ですが、私の配属された部署は経済研究所でした。当時、社会的アセスメントとって、例えば、原発を造るか造らないかの社会調査を多面的に実際にやるわけです。

浅田 安全だという結論を出さないと怒られる？

黒木 それで、純粋に研究者として入ってきた人がほとんどだったので、皆さん悩んでいた、と思う。実は経済研究所のコアな部門は計量経済学の計量モデルの作成で、パイオニアだったから、結構当時は有名だったんです。電中研モデルとって、当時の顧問は森口親司さんなどで、専門の先生たちが始終来て、指導されていたんです。私は、幸か不幸か、そこには配属されなかった。オイルシ

ックを受けて、石油以外にも資源価格が高騰したので、それで電力会社や日本の大黒柱である産業が今後どうしていったらいいかとかという問題を研究するために資源エネルギー問題のセクションに回された。経済の計量分析というよりももっと幅の広い政治経済的なアプローチで、世界的な、特に南側からの資源ナショナリズムの運動を受けて、それぞれ、先進国を含めて各国がどうエネルギー対策を取ろうとしているのか調査しろ、という命令を受けて、冊子をまとめました。それが私の初めての公になった活字論文なんですけど、その筋では、結構、反応がありました。1973年に始まった第一次オイルショックの影響が覚めやらない頃です。だから初めは現実的な分析をやっていたんですが、でも、何となく物足らなくて、できれば大学に戻ってアカデミックな研究をしたいなという気持ちがずっとくすぶっていました。今井賢一さんという、有名な経済組織論の専門家も、電中研に研究員でいながら大学院に派遣させてもらっていたので、私も、と。

平井 まだ健在ですよ。

浅田 そういえば思い出した。岩波の価格理論、1、2、3に書いていた。その第3巻が産業組織で、それを今井さんが書いている。

黒木 とにかく、まだオイルショックが起こる前は、電力会社は余裕があったのか、研究員でいながら大学院に行って勉強をさせてもらっていた。自分も行かせてもらえるかなと思って、しばらく早稲田の大学院に行きながら、電中研で仕事をしていたんですが、ある時呼ばれて、どちらかを選べと言われました。じゃあ、大学院に行きますと。電中研を辞めますと言って、早稲田の大学院に籍を置いて、純粋に研究の道に入ったというのが、私の大学における研究者としての始まりなんです。ゼミは、伊達邦春先生のところに入ったのですが、伊達先生はお顔が広がったものだから、ミクロ経済学では慶應大の福岡先生



を早稲田に迎えられてお世話になり、浅田さんのお師匠さんの荒憲次郎先生にもご紹介いただいて非常にありがたかったのを思い出します。

浅田 黒木が早稲田の大学院に入ったのは何年だけ。

黒木 浅田さんが大学院に入るのと一緒にと思う。1年私のほうが年上だが、その間、社会に出ていたから。

浅田 じゃあ、黒木君が早稲田の大学院に入ったときに、僕は早稲田を出て一橋の大学院に入った。

平井 私も、荒先生のセミナーに呼ばれたことがあり、そこで浅田さんと初めて会いました。後は、駒澤大学で学部は違うが一緒にの時期がありました。

黒木 伊達先生はシュンペーターの大家で、景気循環やマクロの動学理論などを研究しておられたんだが、私は、マルクスの生産価格理論が出発点だったから、どうしても多部門に興味があった。とりわけ、スラッファを中心に、多部門の価格・数量分析をやりたい、と。

浅田 それは最初からそういう考えがあったわけ？

黒木 そうです。特に学部で卒論を書いたときに、スラッファを知ったから、とにかくスラッファをきちんと読んでみたい、と。幸いに、ちょうどそのとき、パシネッティの『生産の理論』が出版された。あれを原書で読んで、修士論文の骨子とした訳です。

浅田 しばらくしてから菱山さんたちが翻訳を出したよね。

黒木 そう。だから、読んだのはまだ翻訳が出る前でした。スラッファの『商品による商品の生産』の解明には、当然、森嶋通夫さんとか置塩信雄さんらの功績も絡んでくるので、そこでパシネッティの『生産の理論』を中心に、森嶋の『マルクスの経済学』を読んだり、あるいは置塩先生の再生産の理論や

蓄積論からも大きな影響を受けました。結局、スラッファ研究を続けたくて、博士課程は京都大学に移りました。

浅田 菱山さん？

野下 菱山先生に付こうと思って京大に行ったの？

黒木 そうです。京大で菱山先生に付いて、スラッファやパシネッティを学ぼうと。

浅田 荒先生は、『経済成長論』という岩波の本があるから、世間的には新古典派成長モデルの専門家みたいなイメージがあったが、実は、もう一つ、多部門の生産理論もやっていた。だから、荒ゼミでは、何と先ほど出たパシネッティの『生産の理論』とか、なぜか森嶋の『マルクスの経済学』とかを読んでいたんです。実は先生は多部門が好きだったんです。

黒木 僕もその話は、荒先生から直接伺いました。だから、個人的には荒先生からも大きな影響を受けています。ところで、京都では菱山先生に非常にかわいがられて、菱山先生が、パシネッティを初めて日本に招聘したときも、ずっとパシネッティの世話係をさせられた。今は大阪大学にいる堂目卓生さんと一緒にね。こうしてパシネッティからも直接、薫陶を受けることができました。

また、京大に移ってから、菱山先生の下で初めてケインズ研究を本格的に始めました。菱山先生の、「君はケインズをやりたまえ」という鶴の一声があったからですが、僕自身は、せっかく菱山先生のところに来たわけだから、スラッファの研究を続けたいと思っていた。ところが、菱山先生に「君はケインズを、『一般理論』だけでなく『貨幣論』も含めてきちんと研究したまえ」と言われたので、初めは半分、渋々と従いました。ケインズに取り組むようになったもう1つのきっかけは、早稲田の大学院時代に、中央大の川口弘先生が講師で来られて、川口先生にも非常に面倒見てもらいまして、先生からも『一般理論』

の読み方とか、特にあの頃はクリーゲルの、  
なんとかいう本を、これまた、原書で読ま  
れました。

浅田 『政治経済学の再構築』というタイ  
トルの本。

黒木 川口先生の監訳で、お弟子さんと一  
緒に後から翻訳を出版されました。そんな  
ことで、ケインズに接近する下地はだいぶ前か  
らできていたということはいえるかもしれま  
せん。一応、私の研究の背景については、こ  
れで区切りとして、ここで、浅田さん、野下  
さん、それから平井さんにお話をお伺いし  
たい。学生時代、大学院時代、それぞれ、い  
かがでしたか？

浅田 僕が黒木君と最初に知り合ったのは、  
君が京大の後期課程を受ける直前だった。僕  
はもう一橋の博士課程にいたが、そのときに  
何か、黒木君のほうから、よく覚えていない  
が、僕のところへ書いたものを持ってきて  
「この論文を提出して京大を受けるんだ」と  
か言って、「読んでくれ」と言われた。それ  
が知り合った最初だと思う。「読んでコメン  
トをしてくれ」と。一応、コメントはしてあ  
げて、それをもとに黒木君が書き直して、そ  
れで京大に受かった。

平井 私が黒木さんと最初に会ったのは、  
どこかの大学の研究会でしたね。それが関東  
だったか関西だったかは、はっきりしないの  
ですが、そのときに黒木さんが入って来て、  
私もそこに参加して、誰かの報告を聞いたこ  
とはよく覚えています。それでこの前、セレ  
モニーで娘さんにお会いしたときお話ししま  
したが「お父さんと昔出会ったことがあります  
が、その頃は理知的な美男子でいらした」  
と。今はどうか知りませんが（冗談）。

黒木 細くて、痩せていて。

平井 そういう話を娘さんにはお伝えしま  
したから、今度娘さんに聞いてみてください  
（笑い）。それが一番最初の出会いなんです。

黒木 じゃあ、結構昔にお会いしているん

ですね、平井さんとは。

平井 京大の院生の頃だったでしょう。一  
番最初の出会いは。

黒木 浅田さんは、一橋の大学院時代に影  
響を受けた先生の思い出についてはいかがで  
すか。

浅田 もちろん、それは指導教師の荒先生  
が一番です。僕は、早稲田にいた頃に、政治  
経済研究会というのに入った。攻撃の攻に研  
究の究ね。今でもありますが。これは、100  
年以上の伝統のある会で、ということは早稲  
田の政経学部の歴史と同じような伝統があっ  
て、結構いろんな有名人も輩出しているわけ  
です。最近は少なくなったとはいえ、早稲田  
の政経学部の教授のなかにも、過去には出身  
者が結構いました。そこに入って、経済学の  
勉強をしたのですが、政治経済だから、政治  
の研究メンバーと経済学の研究メンバーに分  
かれているわけです。政治の研究メンバーの  
中には、僕より確か1学年か2学年ぐらい上  
だったと思うが、ほんの一瞬、朝日新聞の社  
長になった、木村さんという人もいた。とこ  
ろが例の慰安婦問題で、捏造（ねつぞう）の  
報道だったと認めてしまって、謝罪記事を載  
せたでしょう。勇気はあったんだが、そのた  
めに社長になって半年ぐらいで失脚した。法  
政大学の教授の佐藤良一さんもいた。佐藤さ  
んは、大学院は神戸大学の置塩ゼミに行った。  
ゼミの同級生には、富山大学を最近定年にな  
った新里君がいた。担当の薬師寺先生は、当  
時は専任講師で、授業を持ち始めて2年目で、  
ジョン・ロビンソンとかスラッフアとかをや  
っていました。置塩先生の書いたものも、実  
は学生時代から結構読んでいた。数学を使っ  
てマルクス経済学をやるというのは、当時は  
珍しいじゃないですか。一時期はそれにはま  
っていたことがあるんです。早稲田時代は結  
構早熟な学生でしたが、結局、置塩ゼミには  
行かずに、一橋の荒ゼミに行ったんです。

黒木 浅田さんは、若い頃からマルクスの

数理モデルに詳しくかったですね。僕は、浅田さんとの付き合いで、大学院生時代に、彼の知識をだいぶ吸収させてもらった。ところで、われわれは九大の良さをまるで知らないの、今度は、野下さんの方から、九大の様子を紹介してください。

野下 僕は、昔から歴史や社会科学関係の本を読んでいた。九大の経済学部に入り、黒木さんのように自治会に関係していたから、その関係で、九大の先生方を知っていて、木下先生が学部長、森本先生が教務主任が何かだったと思う。団交の場で木下先生にガンガン言ったら、あとで森本先生に呼ばれて、叱られるかと思ったら逆に、木下先生が本気になって反論したのは初めて見たと笑った。森本さんとか木下さんたちは九大出身じゃなく外から来た先生だったので、市民社会的な雰囲気があって付き合いやすかった。

黒木 木下悦二さんですね。森本先生は？

野下 森本芳樹先生は西洋経済史の先生。

平井 向坂逸郎先生の影響などは？

野下 社会主義協会の人たちは、少数だけどまだった。

浅田 ソ連がまだ元気だった頃の、ソ連派だよな。

野下 多くが向坂さんのお弟子さんや孫弟子の人たち。

黒木 あとは、一橋の都留康さんのおやじさんが農業経済でいた？

野下 都留先生ね。思い出した。財政学の先生が社会主義協会だった。また、経済学説史の高木暢哉先生の弟子の荒牧先生も社会主義協会だったと思う。経済学説史の高木ゼミというのは、九大経済の特色なのだが、金融論の研究もやっていた。今は九大教授の深川さんが都留研究室の鍵を預かっていたので、一緒に研究室に忍び込んで、貰い物の高級酒を頂戴していた。もっとも都留先生の授業には出たことがなかったが。

浅田 都留さん、確か、市長選挙に出た。

野下 都留大治郎先生は農業経済。原伸子さん（法政大学教授）の先生なのよ。九大は、今はだいぶ変わっているらしいが、当時はほとんどがマル経の先生で、近経は武野秀樹先生だけだったように記憶している。

黒木 有名な大住さんがいたでしょう。

野下 その先生は僕が卒業した後。僕は結局、深町ゼミに入ることになった。先輩たちがほとんど深町ゼミで、大学1年のときから知っていたので、深町郁彌先生には親近感があった。

平井 立教は九大卒の人が2人ぐらいいるのではないですか。立教大学の若手で。

黒木 九大関係者は立教にもいますね。

野下 僕の苦労というのは大学院時代にやってきた。そのまま学部から大学院に上がったが、九大の場合は同学年で大学院に7人ぐらいしかいなかった。全体で、ドクターも入れても50人ぐらいしかいない。

黒木 当時は国立はたいがいどこでも同じだよ。京大でもそのくらい、大学院生の人数は。

浅田 そうだよ。一橋は修士が確か1学年あたり12~13人で、後期課程に行くと2~3人が脱落するんで、それで後期課程は1学年10人足らずというところか。

野下 そういった時代なので、一面では丁寧に育ててくれるが、別の面からしたら徒弟奉公しなくちゃいけない。僕なんて、下から上がってきたから、非常にわがままだったと思う。先生方をみんな知っているので、別に深町さんだけじゃないという感じで。そして、当時、日本の経済学会も変わりつつあったのを、福岡の僻地にいてもひしひし感じていた。いわゆる近代経済学がだんだん影響力を持ち始めて来た中で、マル経にしても置塩先生のような手法が目を集めていた。他方、こちらはまだ、『資本論』を読んでうんぬんという状況だった。

平井 僕は経済学部のときには、マル経と



近経が大体半々だったという記憶があります。

野下 九大の場合は、近経といえ、非常にテクニカルな感じを受けた。

黒木 経営工学系？

浅田 数学オタクみたいな感じの。

野下 そう。それで、とても、ポスト・ケインジアンとかが入り込む余地はなかった。

浅田 当時は、今よりマル経が強く、近経はむしろ、傍流みたいな感じだった。近経の中の一部の人は、今でもそういう傾向だが、単に難しい数学の計算をすることのみ興味があって、あまり経済問題なんて興味ないんだよ。今でもいると思う。

野下 置塩さんが当時は大スターだよ。

浅田 彼は近経と真逆の立場。今はもう、九大は逆に近経の天下といわれ、時代が変わった。ところが、わが中央大学や黒木君の立教大学は、いまだにマル経が強い感がある。

平井 東大は今ももうマル経はいないんじゃないですか？

浅田 中央大学がすごいのは、マルクス経済学という名前の科目が堂々と2人の専任教授によって教えられていること。

野下 前後するけど、僕は、小さいときから、社会科学、特に歴史学が好きで、それで中世経済史の森本先生にも親しくしていた。森本先生は、大塚史学の東大の松田智雄さんのお弟子さんだ。

平井 懐かしいお名前が出てきました。松田先生。私も習っています。

野下 森本先生は大塚史学が限界にきていると見ていて、ただ海外の文献を読むだけではだめで、若い時から海外に行って修行しろ、と言っていた。大学院に行くとき、森本さんが「もし俺のところに来るなら、すぐフランスに留学させるから」と。そうしたら、フランス人の女の子といい仲になっていたかもしれない。残念だった。九大経済は金融論に伝統があって、岡橋保先生から深町先生と続く金融論だけでなく、経済原論の高木幸二郎先

生も恐慌論と別に、貨幣論もやっていた。経済学説史の高木暢哉先生は、ベームバベルクの資本利子学説史だけでなく、お弟子さんたちと金融論を研究していた。そして高木先生の経済学説史講座を継いだ荒牧先生も通貨論争を研究していた。木下先生も九大に来て、外国為替論を研究するようになった。

その頃、文化大革命がちょうど終わりがけた頃かな、木下先生のところに中国からいっぱい留学生が来ていた。政治的に生産力が位置を決める時代は終わって、どのような生産が中国経済にとって有用なのか分からなくなったんだ。鄧小平の、白猫でも黒猫でも、とにかくネズミを捕る猫がいい猫という訳ではないが、彼らは、世界市場が価値を決める、海外に売れるような生産物に価値があるんだということ学ぶために九大に来ていた。先ほど触れた国際価値論の権威だった木下理論によれば、貿易商品は計画経済で生産されていたとしても、その価格、すなわち価値は市場が決めることになる。当時、中国人の人たちとよく話したが、毛沢東の悪口ばかりを言っていたことが記憶に残っている。その頃、高須賀さんも、九大に非常勤で来ていて、一緒に中洲で飲んだり、どんちゃん騒ぎをしたのが思い出だよ。

黒木 私も京大の院生の頃、均衡点の安定条件を計算するにあたって、京都の祇園の安い居酒屋で飲みながら、理学部の塾のアルバイト仲間に教えてもらった。当時の京都は、まだ出世払いというのが効いて、学生は安く飲ませてくれました。

#### 4. ニュースクールの思い出

野下 時代は変わりつつあり、伝統的なやり方では通用しないのではないかという危機感に取り憑かれていた。といっても九大ではみんな聞いてくれなかったけど。そこに国士館の話があったから、これ幸いと思って国士

館に来たわけ。

浅田 東京に出てきて国土館に就職した後、一橋の高須賀ゼミに出入りしていたね。

野下 浅田君と知り合ったのは、高須賀ゼミの飲み会や合宿。

浅田 そう。高須賀ゼミと僕の出ていた荒ゼミが終わると、飲み屋で一緒になった。同じ時間ぐらいにゼミが終わるわけだから。

野下 そのときは池尾和人さんとかもいた。池尾さんは月に1回くらい高須賀ゼミに顔を出していたんじゃないか。

浅田 高須賀さんのところで、近経も分かる、数学も分かる、というのがマル経の理想になった。高須賀先生本人が、数学も分かるマル経の人になりたくて、置塩さんに憧れていたが、置塩さんほどの数学力がなかったので、挫折したんだろうが、本当はなりたかった。だから、あんまり数学は得意じゃないが、一生懸命計算していたよね。

野下 ただ、マル経の置塩氏の成功体験というのが、今はものすごくマル経の足かせになっていると思う。まあ、まったく意識しない人もいるけれど。

浅田 みんな置塩を目指せと。

野下 それは後で言うよ。東京に出てきて高須賀ゼミの連中と勉強しているなかで、高須賀さんを中心に欧米の新しい批判派経済学の研究をしようということになった。僕は欧米の金融関係の研究者の調査を担当していたんだ。当時、だんだんと批判派経済学のなかにも金融関係の分析をする人たちは出てきた。そのこともあって、結局、アメリカ、そしてニュースクールに行くことになった。

黒木 ここからニュースクールの話しましょう。

浅田 最初にニュースクールに行ったのは、高須賀ゼミ出身の磯貝さん。磯貝さんが帰ってきてから、僕もちょっと便乗して、ニュースクールに行こうかなと思って、彼にいろいろ、「どう？」って尋ねた。「いいですよ」と

言うから、その気になって行ったんです。僕は2年いたが、僕がいる間に遅れて野下君と黒木君が来た。

野下 僕は、ニュースクールなどで、ポーリンとかディムスキーとか、エプシュタインとか、アメリカン・ラジカルのなかで金融問題を研究している連中に会うことになった。80年代くらいからアメリカ経済における金融面の影響が一段と強まり、既に時代は変わっていた。しかしポーリンによれば、ラジカルの大御所、ポールズやゴードンは、まったく金融に関心がないと嘆いていた。

浅田 だけど、今は左翼っぽい人は、ミンスキーなんかを引き合いに出して、金融みたいなことをやろうとする。

野下 ミンスキーもそうだが、根本的にはガーレイ・ショウがあるような気がする。つまり、貨幣や金融は物、商品ではなくて、債権債務の総体として見ようという観点を主流派批判の基礎においているように思う。ラジカルといっても、ほとんどが新古典の教育を受けている人たちばかりなわけだから、マネタリストや新古典派流の金融理論に立ち向かう基礎理論を求めていた。そのなかで、突然、80年代の前半にボルカーが出てきて、金利を上げて高金利になって、一般の人たちや中小企業者が非常に悲惨な目に遭った。

黒木 あれは15%くらいまで上げられましたね。

野下 それからミンスキーもよく使われるようになった。ラジカルでも金融分析が勢いを増してきた。で議論しだした。当時、リーダー的存在が、ポーリンとかパーリとかディムスキーといった連中だった。

浅田 ガーレイは後に毛沢東主義者になった。

野下 それは有名な話だね。それはいいが、ポーリンとかレイとかの批判派は、貨幣や金融を債権債務関係として捉え、商品取引と同じに取り扱ってはだめだという。ただ、それ

は分かるけど、銀行の決済システムとか、銀行預金とか、そういう制度的な問題は何かというと、彼らは十分に詰めていない。ガーレイ・ショーは証券市場を直接金融、銀行は間接金融であって、銀行はまず、お金の代わりになる預金で貸し出せるという。しかし1行だけじゃ発券銀行ではないので、銀行預金は貨幣機能を果たせない。手形交換所とか、内国為替制度とか銀行間組織があって初めて、民間銀行の負債である預金がお金の代わりになるようになる。預金銀行と中央銀行、そして貨幣商品となった中央銀行券から構成されるという現代の銀行システムが金融システムの基礎をなしているということ、批判派の連中と話しても理解してもらえなかった。僕は、日本で発展してきた伝統的な信用論の世界で育ってきたから、政府紙幣と中央銀行券の違いや、発券銀行と預金銀行はどこが違うのかとか、そういう問題を勉強してきた。そんな人間にとっては、アメリカのラジカルの金融論は、確かに内生説でも外生説にしてもそうだが、直接にマクロ経済から金融政策の問題にアクセスできるという点には積極性を感じるが、肝心の銀行とか中央銀行とか、そういうものの基本的概念というのが曖昧なままおいてきぼりにされているように思う。僕も最初は欧米の研究の翻訳とか紹介ばかりやっていたが、そういう仕事だけでは限界を感じた。

浅田 それは、みんな分かっているんじゃないの？

野下 分かっていると思うよ。ニューススクールの何年か後で、アムハーストに行ったんだけど、そのとき、エプシュタインから何やってると聞かれたので、今は決済システムをやっていると云ったら、それって何だ、と返ってきた。だって、今、MMTというの、概念的に詰めるべき点をすっ飛ばして政策的な有効性の問題に議論をすり替えている。

浅田 いや、MMTというのは当たり前の

ことしか言っていない。

野下 ニュースクールにおいても、ゼムラーのような外国人とデビッド・ゴードンのようなアメリカン・ラジカルの人たちはまったく雰囲気違っていった。ゴードンや彼から指導を受けたポーリン、そしてパーリらは、抽象的な概念の吟味よりも、アメリカをどうしようか、大統領選挙に際しての綱領をどうしようかということ、を、まず、真剣に考える。

浅田 ゼムラーは、いまだにドイツ国籍だから。

野下 結局、アメリカの批判派は、アメリカの社会経済制度の改革に関心があって、理論を詰めることにそれほどこだわっていないように感じる。現代のMMTも含めて、ラジカルは非常に政策的なんだよね。80年代末当時は、「ウォールストリートを占拠せよ」じゃなくて、ハーレムの占拠が運動としてあった。当時、ハーレムの再開発のためにアパートが閉鎖され、黒人や貧乏人たちがみんな追い出されてしまうから、アパートメントを占拠せよという運動。そういう運動に参加している人たちがラジカルのサマーキャンプに来ていた。また、居留地からネイティヴ・アメリカンの人たちも来ていて、居留地の問題について話していた。そういう問題に対して、ラジカルが積極的に関わる。つまり、アメリカの批判派というのは、非常に実践的であるという印象を持った。まず現実の問題があって、次に問題解決のための政策があり、それをサポートする理論がどうあるべきかを考えるという順序じゃないかなあ。逆にいえば、決済システムがどうかとか、銀行と証券はどう違うのかといった、あまり細かいことは問題にしない。それは、問題意識としての積極性でもあるけれど。そう考えると、アメリカのことやラジカルの金融理論を日本人の俺がやって、何の意味があるんだろうかという疑問が湧いてくる。日本のこと、日本の歴史や制度を念頭に置いた研究をやらなければなら

ないんじゃないか、そして理論的にも詰める余地があると思って、独自の発展を遂げた日本の金融理論をもう一度始めから考え直そう、単なる新しい欧米の理論の紹介や輸入ではなくて、日本の金融理論の伝統との統合をはかろう、といったようなことを考えて、日本に帰ってきたわけ。そうしたらその頃に、バブルがはじけて。こんなに酷くなるとは思わなかったが。それで、浅田さんとニュースクールと一緒にいた記念にウォルフソンの『金融恐慌』を東北学院の原田も加わって一緒に訳したわけ。

平井 その頃、日本でもポストケインジアンの人々が集まり始めましたね。立教にも何人かいらっしやいました。大塚勇一郎先生など。ポスト・ケインズ派研究会というのは、元々は川口弘先生が組織されたものです。

浅田 川口さんが立ち上げて、それで弟子の緒方さんや福田川さんが中心になって。だから最初は中央大学でやっていたんです。

黒木 じゃあ、今度は私が引き継ぎます。私はニュースクールには1990年に行きました。1980年代後半にはPK（ポストケインズ派）でやろうと、気持ちはそっちのほうで固まっていた、その頃、結構、明治の原先生門下の渡辺良夫先生に随分お世話になりました。渡辺先生はポール・デビッドソンと親しく、デビッドソンを日本に招いたときに、僕はそのときは大阪産業大学にいたのですが、頼まれて、京都を案内しました。当時、PKの中で、貨幣の内生性が非常に強く言われたしましたが、まだデビッドソンを読んでいたときには、それをあまり感じませんでした。しかし、貨幣供給の内生説を主張するペイジル・ムーアの影響は非常に強く受けました。ムーアも日本に遊びに来たので、彼にも京都を案内しました。ムーアは人間的にも非常に魅力のある人でした。ホリゾンタリストとか呼ばれていましたね。

浅田 あれは結局、利子率の外生説。だけ

ら、利子率を外生にすると、マネーの量は内生にならざるを得ない。

黒木 理論的にはそういうことだよ。片方を外生にすると、片方は内生になるという話でね。そういう区分けの、現実はどこが近いかということですね。

浅田 最近は、正統派でも利子率を先に決める。

黒木 だから、そういう意味での下地みたいなものを、もう既に、PKのムーアを中心につくっていたんじゃないかな、と。金融論では、彼らの影響を私は非常に受けています。ただ一方で、京大に移るときに提出した論文が、二階堂先生の“Marx on Competition”という論文を下敷きにして書いたもので、再生産モデルの真の意味での動学化に強い関心を持っていました。二階堂副包先生は、一般には数理経済学の世界な権威として知られていますが、実はマルクスに非常に共感されていたようで、私も昔から、なぜ転形問題は解決できないのかということに関心があったものだから、そこで、二階堂先生の貢献がブレイクスルーになるんじゃないかと思って、まだ公には未公表の、一部でだけ回し読みされていたタイプ印刷の原稿を一生懸命に読みました。

浅田 二階堂先生は、後で分かったことは、ご本人が言っているわけだが、旧制高校時代に、戦前ですよ、マルクスボーイだったと。本人が言っていました。だから、それが晩年に突然また出てきたわけ。

平井 『現代経済学の数学的方法』という本を執筆なさった。

黒木 そう。あの本で有名な先生で、大学院時代に一生懸命、勉強しました。

平井 私もあの本は一生懸命読んだことがあります。

黒木 でも、あれは正統派の数理経済学の基礎みたいなテキスト。

平井 そうですね。そっちのイメージが強



いです。

黒木 二階堂先生のことは誰でも正統派の数理経済学の大家と思っていますよ。それが、突然、マルクスモデルの研究論文を書かれて、しかも、誰もある意味で試みたことがない、置塩さんですらやったことがない、貨幣資本の部門間移動という問題を、数理経済学的に定式化された。この問題は、実際、誰もやっていなかったんです。だから、それが非常に刺激的で、それで自分なりに消化して成長モデルに拡張した論文を書いて、京大に提出したんです。それがきっかけで、京大の院生時代にその論文を京大の『経済論叢』に載せ、二階堂先生にも読んでもらった。そしたら「黒木君、君の定式化じゃ、これは実際には貨幣資本は部門間を移動しないね」というふうにお手紙で詳しく指摘されまして、「えっ?」と思って。ちょっと技術的な話になりますが、私は、それぞれの部門の投資関数に利潤率の格差だけを入れていたんです。そうすると、結論から言いますと、実は結果的にはマネーとしての資本が部門間で移動せずに、それぞれの部門でまた再投資されるような、数学的にはそういう形になってしまうんです。だから、もう一工夫、どうしたらいいかと思い悩んで、最終的に気が付いたのが、それぞれの部門の生産量の比率でした。例えば、2部門の経済で、農産物と鉄の生産部門があるとしたら、それぞれ生産の期末(=次期の期首)に農産物と鉄がどれだけ生産されるか、その比率も投資関数に影響する。このように定式化すると、うまく利潤率の格差に反応してマネーが移動できるような再生産モデルが出来上がったんです。ここでモデルから得られた結論だけ述べますと、他部門の生産物(アウトプット)を原材料(インプット)に使う度合いが強いほど、経済全体としての数量体系も価格体系も共に安定化する傾向が強くなり、反対に、システムが自分の生産物を原材料として使う自家消費的な生産構造に近づくと、

不安定化する、これが得られた結果です。数学的に簡単に言うと、2部門の投入係数行列の行列式が負値になることが安定条件です。この結論にたどり着いた背景のひとつに、学生時代に学んだ、サミュエルソンらが証明した、価格と数量の双対不安定性定理に対する不信感がありました。多部門で数量体系が安定なら、価格体系も当然、安定化するはずだ、と。双対不安定性定理は、固有根に対応した均等利潤率をそもそも前提にしているので、数量・価格ベクトルの安定性について得られた結論が数学を応用したものであれ、経済学の定理としては問題がある、と。これも面白い話ですが、当時京大に来ていたパシネットの勧めもあって、改訂版を英語で書いてCambridge Journalに投稿した。そうしたら、あれは確か編集局から手紙が来て、結論からいうと、駄目だというんです。そういうレフェリーの指示があると。ついては、その理由についてはレフェリーから手紙が行くからというわけ。当然、残念だなと思った。その覆面レフェリーがゼムラーだった。彼から急に手紙が来て「おまえの論文は俺の本に載せてくれ」というんです。

浅田 結局、ゼムラーがレフェリーだったんだが、Cambridge Journalはリジェクトして、そのまま自分が編集した本に載せようというんだ。

黒木 そう。結論的にはそういうことで。それが私の英語で書いたデビュー論文。こうして、ゼムラーと知り合うきっかけができたんです。

浅田 僕がゼムラーと知り合いになったきっかけは、駒澤大学にいた頃だから、1985~1986年の頃か。城西の藤森頼明さんから電話が来て、ゼムラーという人が、ニュースクールで動学、ダイナミックスの国際コンファレンスを計画していると。僕もグッドウィンだとかカルドアとかを基にして動学をやっていたので、藤森さんが、自分に行く気はない、



アメリカは怖いので、アメリカには足を踏み入れたくないんだが、もし浅田君に行く気があったら、ゼムラーに連絡して、招待状を浅田君のところに回すよう言っておくが、と言うんだね。

黒木 藤森さん、CIA に捕まるから（笑い）。

浅田 実は、30歳を超えたばかりの僕はまだ外国に行く用がなかったんで、パスポートも持っていなかった。だけど、何かやる気が出て、これはやってやらなきゃいかんと思って、行きたいのでお願いしますと返事した。そうしたら航空郵便で駒澤大学に招待状を送ってくれた。それで、以前に日本語で書いたカルドア型の景気循環モデルを英語に直して、それで報告したわけです。それが1986年かな。だから、ニューヨークに行き、初めて会った。それがきっかけで、ニュースクールに行った。3年後に、ね。だから僕の海外デビューのきっかけをつくってくれたともいえるわけだよ、藤森さんとゼムラーが。それでゼムラーの研究室に行ったら、あなたのやっていることは自分もやっていることに近いとか何か言って、気さくな人だから、随分話をして、そして研究会で発表した。せっかくだからと海外ジャーナルにも自分で投稿したわけです。Journal of Economics という雑誌で、ドイツ人が編集委員をやっているが、オーストリアのウィーンで発行している。

黒木 前は違う名前だったな？

浅田 ドイツ語と英語名のジャーナル。いまドイツ名を取っちゃって。

黒木 そうなんだ。国際化しようよ。

浅田 そう。英文雑誌になっちゃった。以前は英文とドイツ語と両方が交じって載っているような雑誌で、僕がレフリー制の海外ジャーナルに投稿したのはそのときが初めて。そうしたら、何か好意的なコメントが返ってきて、載っちゃったんです。それが僕の海外ジャーナルのデビューで、それが載ったのは、

1987年かな。後に、レフェリーがピーター・フラッシュェルという人だと分かったが、ゼムラーの仲間で、まだそのときは会っていなかった。

平井 後で分かったのですか？

浅田 なぜ分かったかという、掲載されて1年ぐらいしたら、フラッシュェル本人が僕のところへ手紙を送ってきて、「あの論文をレフェリーしたのは、実は自分だ」と書いてあった。それで「もしドイツに来ることがあったら、研究会などをアレンジするので連絡してくれ」と書いてあった。それで、後にフラッシュェルのいるドイツの大学に行くことになった。それからまた1年ぐらいたった頃、コンファレンスのプロシーディングスを英語で出すから、そのとき発表したのを送れとゼムラーから言って来たわけ。僕は「実は、あれはもう別のジャーナルに投稿して載ってしまったので、別の論文でいいか」と言って、グッドウィンの景気循環論の日本語で書いたのを、また英語に直して送ったら、これはコンファレンスのテーマにフィットするからいいとかいって、載せてくれたんです。それで、また1本増えて、それが、僕の外国語の論文がどんどん増えていくきっかけですよ。89年に、駒大から在外研究に行かせてやる、というので、それで2年間、ニュースクールに行ったんです。

黒木 私も、ゼムラーとの出会いがあって、ただ、そのときはマルクスのモデルの発展について、特に部門間の利潤率の均等化問題を深めるといふ目的で、ゼムラーを訪ねたんですが、ニュースクールに滞在中、ミンスキーモデルに関心を持つようになりました。実はミンスキーにはニュースクールに行く前に、イタリア北部の港町のトリエステで行われていたサマースクールで会っているんですよ。そこにデビッドソンも来ていたが、ミンスキーも来ていまして、そこで彼に会ったのが最初でした。

平井 後にあそこで分裂しましたよね。

黒木 そう。ちょうどその翌年くらいに分裂するんです。ヨーロッパのスラフフィアンを中心にしたネオリカーディアンとアメリカのデヴィドソンなどを中心としたポストケインジアンとの分裂。僕はとても悲しかった。

浅田 僕もニュースクールに行く直前に、駒澤の吉野さんという同僚と、当時は北海道大学の内田さんと3人で、ミンスキーの代表作の *Stabilizing an Unstable Economy* (1986) を訳した。

黒木 そうだったね。1990年の夏休みにサマースクールがあって、それでトリエステに行って、その足でニュースクールに行きました。サマースクールでは、とても印象深い思い出がある。ミンスキーが、講演の後、何か質問があるか、というから、恩師の菱山先生から、『一般理論』の第17章が大事だ、と耳にタコができるほど聞いていて、つまり、自己利子率をめぐる問題の章ですね、それをミンスキーにぶつけたわけ。そうしたら、自分もそう思う、と。あの章は、『一般理論』では独立した章で、突出して見えるが、貨幣経済を考える上で、非常に重要な章なんだ、と。まさに、我が意を得たり、でした。これで、ミンスキーファンになった。

浅田 ニュースクールに来てから、ハドソン川のほとりの、ミンスキーが当時いた本拠地、レビーインスティテュートに黒木君と一緒に行ったね。コンファレンスと一緒に行って、そこでミンスキーにも会った。

平井 レビーインスティテュートは、ニュースクールのすぐ近くにあるのですか？

浅田 ニューヨーク州にあるが、ニューヨークシティーじゃないよ。ニューヨーク州は広いから。ニューヨーク州の相当、北の方。片田舎にあるんですよ。電車で行きました。ハドソン川という大きな川に沿って。

黒木 電車で1時間以上かかったよね。

浅田 かかったね。さらに、駅には何もな

くて、駅からまたタクシーを呼んでもらって。

黒木 91年の1月に、ピッツバーグで学会があった。鉄鋼の街。経済学の年次大会みたいなね。そこで初めて、僕はミンスキーモデルというのを自分で勝手に作って、GDPと負債累積との関連についてのダイナミックなモデルを報告したんです。条件次第で均衡点の性質が循環になったり、あるいはサドルポイントになったり、あるいは複数均衡の可能性だとか、そういうさまざまな性質があり得るんだという内容の話でした。当時、学会で報告はしたけれど、それは英文では出版はしなかった。ただ、帰国してから、英文の論文を出版した。*Growth and Debt Accumulation* だったかな？ 日本語でも、その後、アメリカでの成果をもとに幾つか論文は出すことができた。バブル崩壊とその後の深刻な景気後退もあって、帰国後の十数年間、所得変動と負債累積との連関についてずっと興味を持ち続けました。そのときの研究の基本的アイデアの源泉は、ケインズはもちろんですが、フィシャー、ミンスキー、そしてトービンらの業績ですね。浅田さんの論文から受けた刺激も大きかった。この頃のエピソードを1つ紹介しましょう。あれは、90年代半ば、円高が進んで1ドル90円を切るか、という頃だったと思いますが、ある会合に呼ばれて講演をしました。北朝鮮が初めてミサイルを飛ばしたときで政府も大騒ぎをしていて、アメリカの大使館をつうじてだったか、米軍関係らしい専門家の軍事情勢についての話もありましたから、何を目的にした講演会だったのか、思い返すだけでも不気味ですが、とにかく、その講演で、6%に公定歩合を上げたために投資できないどころか利子の返済すら滞る可能性があるのに、こんなに円高ではトリプルパンチ（バブル崩壊、利子率の高騰、異常な円高）もいところだ、と話したら、若手の大蔵官僚たちが円高は日本経済の強さの証明なんだから何が悪いんだ、と反論を喰ら

った。何も分かってないな、と思いました。当時は、未曾有の深刻な不況で輸入が滞り、海外に投資していた企業は負債残高の圧縮を迫られて、海外の資産をどんどん売り払っていた。高層ビルやゴルフ場などですね。有名なのがニューヨークのロックフェラーセンターです。あれは一時ですが、日本企業の所有だったんですからね。当然、資本が日本に還流すればドル売り円買いで円高になる。ケインジアンの小野善康さんも指摘していますが、実力を伴わない円高はむしろ不況の証明のようなものです。

ここで今度は平井さんから東大のいわゆるマル経の影響について、ちょっと紹介してもらえるとありがたいんですが。

## 5. 大学における教育と研究

平井 多分、私は大学に入る前に、高校生のときに、自分の家の近くの古本屋で、ソ連の共産党系の何かのシリーズで、翻訳ですが、史的唯物論が何かそういう感じの哲学の本をたまたま買ってちょっと読んだことがあるんです。読んでいて、これは面白いなと思って、それがちょっと心の中に残っていて、大学に入って、もちろん今とは全然世間の事情も違いますが、経済学はもうマル経をやろうと思っていました。何かごく自然にそう思って、それで駒場に入って、2年間は私は昔の言葉でいうとマルクスボーイでした。今ここで思い出すのは、『ドイツ・イデオロギー』を読んだり、『資本論』もちょっとかじったりはしましたが、主な関心は唯物論の哲学にあって、それで教養のゼミなんかも、そういう関係で、国際関係論の菊池昌典先生のゼミにも出て、『国家と革命』を読んだことを覚えています。駒場では、例えば、内田忠夫先生がサミュエルソンの『経済学』を教えていらっしゃいました。マンモス授業でしたが、私も受けていました。その当時は、「ブルジョワ

経済学』と思っていました。イデオロギー的にそういう意識が当時の私にはありました。

野下 懐かしい言葉だね。今は死語ですが。

黒木 平井さんからこういう言葉が出るとなんか心強い。

平井 こういう話はほとんどしたことがないですね。それで、本郷に移ったときは、当然ですが、僕はもうマル経だったのです。それでマル経で伊藤誠先生。もちろんまだ若かったです。30歳になったかならないぐらい。で、伊藤ゼミに入ったのですが、それから1カ月たった5月に東大闘争が始まったんですよ。医学部の問題から始まって、そこからご存じのように、最後は時計台の攻防戦にまで行くわけです。私は伊藤ゼミで宇野弘蔵の『経済政策論』という本を読まされました。5月に東大闘争が起きたので、結果からいうと、4~5回しかゼミがなかったことになりました。マル経系のゼミであることもあって、大体急進的でしたから、すぐにゼミをボイコットみたいなかたちになってしまいました。先生をボイコットすることになったんです。そういうのがはやっていました。先生をボイコットして、われわれゼミ生十数人で自主ゼミなるものをしていたのですが、何をしたら、要するに、東大闘争の問題について自治会を中心としたいろんな活動に参加していました。デモとか、それからいろんな抗議行動とかもありました。そういうことばかりをやっていました。

浅田 じゃあ、もう勉強じゃないじゃない。

平井 ですから、勉強はもうそこで終わっているわけです、はい。1968年のことです。

黒木 プラハの春の前後。パリの5月革命。

平井 東大の入試がなくなったのは、翌年1969年でした。

浅田 69年か。その年だけは東大に行こうと思って、試験がないから行けなかった。そういう人たちが一橋とか京大とかに行った。

平井 結局、正式のゼミとかもなく、そ

れで私は当時、結果的に授業を受けていないんです。一般的にそういう環境だったような記憶があるのですが、それで当時、時計台の周辺のみならず中でもよく集会が行われていました。私もよく参加していました。

黒木 平井さんが？ 本当？ それは面白い。

平井 結局どうなったかといったら、そんなことばかりやっているうちに、翌年の3月ぐらいに、定期試験が当然ありました。3年の終わりの試験です。私なんか当然のことながら、何の準備もしていないわけです。ところが、このときにまた学生運動による直前のなだれ込みがあり、試験会場が占拠される事態になりました。それで大学側が機動隊を呼んで排除することになったが、結局、定期試験は中止になってしまいました。その結果、その年は、全部レポート試験ということになりました。

浅田 実はその名残があって、ということでは黒木君もそうか。僕が早稲田の学生のときに、1年、2年、最初の2年間は定期試験になると、自治会と称して過激派の学生が乱入してきて、常に中止になるので、最初の2年間はレポート試験だけでしたよ。

平井 そうなんですか。私なんかは、もう全然、授業とは関係なかった（出席していなかった）から、突然レポートになっても、書くネタが何もないわけですよ。だから、友達のところに行って、ノートを貸してもらったりしながら書いて出したりしていました。

浅田 だって、レポートを本人が書いているかどうか分からないんだから、誰かに書いてもらっても。

平井 それで、結果からいうと、当時の言葉でいうと、笑い話ですが、「カ・フカ賞」でした。見事受賞。私はその結果はやむを得ないなと思いました。

浅田 僕なんかは、レポートを書いて封筒に入れて郵送ばかりしていたが、全部優なん

だよ。それで、友達に「俺の分も書いてくれ」なんて言われて。

平井 それで結局、4年になったときに、授業が再開になりましたが、このときに私は伊藤ゼミに戻りませんでした。もう全然違うことをやろうと決意して。全く違うこと。マル経でない方をやろうとだけは思っていたが、ただ、どこのゼミに行けばいいのとか、情報は何もないわけです。だって、イデオロギー的に、ああいった考えをずっと持っていたのですから。友人は皆、マル経でした。

浅田 ブルジョワ経済学。

黒木 余談だが、当時、川島武宜先生、という、民法の大家がいて、その先生は、過激派学生に「お前、法学部の教授か？」と言われて、そうだとしたら、ボコボコに殴られたんだって。以後、退官されるまでずっと辞表を懐に入れておられたって。その話を聞いて、僕は、過激派学生の暴力にはかなり抵抗があった。高須賀先生も、授業を過激派学生が邪魔しに来たら「おまえら、マルクスをちゃんと読んで顔洗って出直して来い」と叱ってやった、って笑っておられた。

平井 それで結局どうなったかといいますと、秋口になったときに、海外へ留学していた先生だけが新たにゼミを開講するという方式になっていました。ずっといる先生は4月からもう開講しているわけで、これはもう取れないわけです。だから、結局、9月に経済学部の事務室に行って「ゼミを取りたいんですが」と事務の人に相談したら、「今度新しく帰ってくる先生が3人いらっしゃいます」とか言われて、「どういたしますか」ということになったわけです。みんな若い先生でした。それで僕は、根岸ゼミを選ぶことになったのです。ラッキーでした。

黒木 そうなんですか。じゃあ、偶然？

平井 偶然というよりも今思うと運命的出来事でした。

浅田 それも何か数学の計算ばかりやって

いるようなゼミに入っちゃったんだね。

平井 そういうわけでもなかったのですが。それで結局、後期が10月からでしたので、もう4年の後半になっていました。公務員とかサラリーマンは向かないし。商売にも向いていないし。子供の頃、東映のチャンバラ映画が大好きで、越後屋はよく見ていました。

浅田 越後屋、おまえも悪よのう。なぜか越後屋なんだよね。

平井 東映のチャンバラの時代劇中ではそういう話でしたね。大学は荒れていましたが、景気は良かった頃のことです。友達は就職が内定している中で、私は進路が決まらないうちに。それに「カ・フカ」という悲惨な状況です。

浅田 可か不可。カフカ。だけど、そのカフカという作家を誰も今は知らない。今はA、B、Cだから、可とか不可とかいう言い方も知らない。今の学生は二重に「カフカ」の意味が分からない。

平井 結局、私の場合は大学院に行く道を選択したのですが、行くにしたってこの成績ではちょっとまずいし、というわけで、やっぱりちょっと何とかしなきゃいけないというんで、留年することにし、そしてそれからの1年半は大学に入って初めてまともに勉強したという次第です。いわゆる学生的な勉強に真面目に取り組んだのはそのときです。それで根岸ゼミに入って、1年半はそこで真剣に学びました。先生はオーストラリアから帰ってこられたのですが、最初に手にしたのは、藤野正三郎先生の『日本の景気循環』でした。とても分厚い本ですから一部だけが取り上げられました。

浅田 一橋大学の経済研究所の人だよな。

平井 そうです。一番最初はあの本が教科書みたいになって、総供給関数論争とかを議論したことを覚えています。その後は国際経済学を学びました。あのとき、根岸先生は国際経済学を研究しておられまして、バグワッ

ティのペンギンの本とか、オーストラリアの研究者の国際貿易の本とかがゼミではとりあげられていました。そういう次第で、ノーマルなゼミ生活を送って、それで結局、大学院に入りました。

浅田 じゃあ、ついに墮落してブルジョワ経済学に染まってしまったという。

平井 それで、僕はそれまでマル経をやっており、近経では何をしようかと思ったときに、ケインズの名前が一番最初に頭に浮かんできました。マクロ経済学の当時の中心はケインズ経済学であったということも関係していると思います。

黒木 じゃあ、それは結構初めからですね。ケインズ研究。

平井 そういう気持ちはちょっとありましたね。マル経をもうやめると決めたときに、じゃあ、何をしようかと思ったときに、あんまり勝手に自分で、偏見を付けずに、まず読んで、冷静に理解した上で決めるみたいな態度にならないといけなうと考えました。もう最初からイデオロギー的に気に入らないものを除くというような姿勢はとらないようにしたいという気持ちはありました。

浅田 それはいいですね。

平井 そういう気持ちで近経のほうに入って、ちょっと客観的に見るみたいな感じでした。そのうちにケインズにはまってしまったということです。そういうことをやっていたのですが、大学院の試験を受けたときに論文試験があって、その試験は『一般理論』関連で提出しました。それはゼミ論でもあったんですが、ゼミには卒論という制度は特になかったけれど、それに当たるものを書いていましたから、その延長線上で書いたものを提出して大学院に入りました。ところが、われわれの世代は非常に運が悪く、大学院に入ったら、すぐにまた大学院でストライキが発生するという事態になってしまいました。

黒木 大学院のストライキ？ そんなのが



あったんだ。

平井 ストライキになって、私はもう全然そういうことには関係しなかったのですが、自治会側がどういう要求を教授会に出したかという、講座制撤廃。あれは徒弟制度だから、と。

浅田 そうなると指導教授がいなくなっちゃうわけだ。

平井 それに対して、教授会からの即答があり、「分かりました」になってしまったのです。

黒木 逆にそれが都合が良かったわけだ。教授会にとっては。

平井 つまり、「分かりました」となったために、われわれの世代の、多分、7～8年間は指導教授制度が存在していないのです。制度的に。

黒木 だから、先生はいいんだよ、楽ちんで。責任を持たなくていいから。

平井 つまり、大学院教育が、もうめちゃくちゃになりました。指導教授がいなくてしょう。それで結局、院生は根なし草状態に置かれることになったわけですよ。

浅田 ですよ。東大は冷たいから、学生が脱落して消えても放っておかれるでしょう。そういうところがあるでしょう。

平井 放っておかれる。だから結局、私なんかは、大学院の正規の教育というのは、あんまり受けていないんですよ。もちろん興味がある授業には出たりはしていましたが。小宮先生と浜田先生がペアでやる共同ゼミみたいなのがあって、そういうのには私は出たりしていましたが、一般的にもっと地道に指導教授に教えてもらうというのがなかったのです。私の世代はそういう世代なのです。だから、もっとちゃんとしている人は、見切りをつけて外国に出ています。

黒木 出た者勝ちだみたいなの。

平井 だから、結論だけ言うと、要するに追い出されるときが来るでしょう。5年ぐら

いとかたってきたら、オーバードクターになってくるし。そうすると、こっちは社会に放り出されるわけですが、放り出されたって、大学で職を得ようと思っても、まともな論文がないわけです。

黒木 活字論文がないわけだ。

平井 大学院も無責任なの。もうそういうのを一切面倒を見てくれないわけだから。根岸先生とは、学部ゼミ以来の関係は個人的にはあったのですが、制度的な問題があり、結局5年くらい過ぎて、何とかするといったって、まともな論文はない、という状況に陥ってしまったわけです。以後、日経センターや日本総合研究所でお世話になったりしていました（同研究所では、野田一夫先生に大変お世話になっています）が、研究職につきたいという気持ちが消えることはありませんでした。自分でも、公募的なところを受けたりしましたが、うまくはいかない状況が続いていました。そうしたなか、救いの手が来たのは、根岸先生でした。「平井君、こういうのがあるが、どうですか？」とあの根岸節で言われました。それで職を得たのが駒澤大学でした。駒澤大学はとて、給料が高いんです。今でもそうですが。

浅田 高かった。僕も専任講師で入ったんです、公募で。給料、良かったです。

平井 20代の大半がこのような状況でした。同時期に東大の大学院に入った人は、私と同じような経験をしていることになります。それで、僕は31歳になって駒澤大学に入ったときに、何か自分がものすごく情けないと思いました。どうしてかという、学者に一応なるうとかいう気持ちは、マル経のほうではあったのですが、上記のような紆余曲折で、めちゃくちゃになり、まともな論文もないというような状態で、大学に就職したわけですから、こうした経緯だけは、肝に命じて猛省することにしました。自分の若い時の生活は結構、今言ったようにでたらめでしたが、あと

で思い出してみると、研究者としての一つの原点は、18歳か19歳にあります。それは何かといったら、一浪したときに、受験勉強をまったく孤立した状態で「戦う」という状況に追い込まれたことです。予備校は途中でやめ独学でやりました。しかも、苦手な化学を克服して。実家からは離れて一人下宿生活を送ることになり、だれにも相談できないなかで受験勉強を断行することになりました。このときに実は、自分の勉強スタイルができたように思います。そのときはそんなことは思わなかったのですが、結局全て自分で決めなきゃいけないくて、いろんなことを考えるのも全部自分で考えて何かしてという癖が、そのときに随分身に付いたことはよく覚えています。それが一体、将来何の役に立つのかということ、もちろん何も分からなかったのですが、後で振り返ったら、やっぱり、あのときの不遜な態度が、後々まで、良きにつけ悪きにつけ、影響を及ぼすことになりました。東大の授業だって、講義などはくだらんと思う傾向がありました。あんなのは自分で勉強すればいいと思って、基本的にあんまり講義に熱は入っていない状態でした。だから、研究するというのは、全部自分1人で基本はやらなきゃいけないという姿勢が、19歳ぐらいのときに実はできているように思います。

浅田 それは、研究者としては、いいですね。

平井 東大と早稲田を受けたときは、もう本当にひどいんですよ。早稲田は全国で一番最初の授業料値上げ闘争で大紛争になっており、連日テレビで放映されていました。私が政経を受けたとき、前日に、学生運動の団体が会場を占拠してしまい、試験が危なかったんです。それで、これはどうなるんだと思っていたら、機動隊が入って会場の確保ができたということになりました。あれは東西線かな、早稲田の駅を降りたら、もう階段を上った最初のところから大隈講堂まで、機動隊が

二列に並んでいて、受験生はその間を通して受験に行くというのが、一番最初に受けた受験の洗礼です。

浅田 僕が受けたときもそうですよ。だって、僕が受けた1年前に川口君殺害事件があったわけですよ。だから、試験を受けた当日も、まさに正門の前の道路の両脇に機動隊の車があるじゃないですか。機動隊のトラックが。もう機動隊の車がずらっと。

平井 あともう一点だけ、やっぱり私は理論でやりたいと最初はずっと思っていたのですが、それで経済学史には特に興味はなかったのですが、何でそっちに行ったかといいますと、2つ理由があって、第1に、根岸先生もその頃から経済学史にかなり興味を持ち始めたということがあり、第2に、早坂忠先生がHOPE (History of Political Economy) という経済学史の研究会を主催しておられて、それでこっちに来いということになり、駒澤に入ってからそれに参加するようになりました。それがきっかけで、元々そういう見方というか、経済学史的な見方というのは、発想自体は嫌いじゃなかったから、やっているうちにだんだんとそっちの方にはまっていたという次第です。

黒木 HOPEは結局、最後はどうなるんですか。

平井 作ったときは、例えば、日経新聞なんかからお金も出ていて、ちょっと関係があったんです。だけど、あるときから関係が切れたのと、内部でもいろいろ問題があったりしたこともあって、最後は自然消滅しましたね。

黒木 そうなんですか。自然消滅ですか。何か1回か2回、出た記憶は何となくあるんです。

平井 会報も出ていました。

黒木 例の白桃書房から出された最初の本は、駒澤の時代？

平井 あれは、私が駒大にいたときに一生

懸命やった思い出深い本ですね。まだ中途半端なところで終わっているのですが。駒澤大学では先輩の先生から大変可愛がってもらったことが、深く印象として残っています。

黒木 京大のゼミのときに、瀬地山先生がその本を輪読に使いました。

平井 そうなんですか。それは光栄の至りです。瀬地山先生による書評が、理論・計量学会の機関誌に出ているのを読んだことを鮮明に覚えています。

黒木 そう。ちゃんと読まされました。その時の印象は、平井さんという人は結構、新古典派の人かなと。うろ覚えですが、多部門の一般均衡でやっていて、それをどういうふうに集計するかとか、そういう印象が初めはあったの。

浅田 でも、どうして専修大学に移ったの？

平井 近代経済学史を新しく作るから、と言われて。

黒木 それは、早稲田でもありましたよ。近代経済学史説。確か柏崎先生だったかな？

浅田 あった、あった。

平井 それは専修大学になかったので新設でつくって、それを担当しろと。もう最初から正統的な経済学史と別に、新設の何かついでに付け足したみたいな感じがなくもない科目として。近代経済学史。上記のような次第で、私も経済学史関係のことに関係する機会が増えていたことが影響していると思います。渋谷駅近くの店で、吉澤芳樹先生、早坂忠先生と面談したことを覚えています。

浅田 だって、当時は経済学史というと、マルクスで終わっちゃうから。マルクスより新しいことはやらないだよ。

黒木 そう。アダム・スミスからマルクスまで。

浅田 アダム・スミス、リカードウ、マルクスで終わっちゃうんだよ。

平井 それこそ、内田義彦先生とか、大御所たちがいらっしやったから。

浅田 だから、それ以降は近代経済学史とか、別の科目をつくらないとやっていけない。

平井 それでやっぱり経営学部より経済学部でやったほうがいいだろうという気持ちがあったから、「じゃあ、お願いします」みたいな形で、僕は専修に移って。専修にほぼ10年ぐらいいたかな。あときは随分といろいろな先生に可愛がってもらって、中村秀一郎先生、正村公宏先生、鶴田俊正先生を中心とした研究グループがあって、いろんなところで合宿をしました。専修大学にいたときには、『一般理論』の形成史をめぐる研究に夢中でした。その後、私は上智大学に移ることになりましたが、これは兼光秀郎先生から、電話を頂いたことがきっかけでした。

黒木 「ヘンダーソン・クウォント」の兼光さん経由で？

平井 電話がかかってくる、「平井さん、ちょっと会いたいんだが、いい？」と言われて、「新百合ヶ丘で会いましょう」ということになった。何だろうと思って行ったら、やはり根岸先生との関係で上智大学に誘われたという次第です。その頃、東大出版会から出した『ケインズ研究』に好意的でした。

黒木 最後になってしまうんですが、今せっかく経済学史の話が出たんで、その話を。僕も理論研究では、浅田さんが先鞭（せんべん）はつけておられたが、景気と負債累積の連関という問題をずっとやって来て、取りあえず、もう打ち止めみたいな感も実はあって、例えば、野下さんは現状分析とか制度分析とか、そちらのほうに深掘りされていかれたんだろうが、僕は現実をしっかり見て分析するというのは実はあまり得意ではないので、ちょっと歴史のほうに戻ろうと。そういう意欲というか、興味が出てきたんです。実は、突然というわけではなくて、学部生のときの授業に、私の付いた西川先生のお師匠さんである山川義雄先生という偉い先生がいて、その先生は学説史の専門家で、フランスの18世紀

のケネー前後を専門にしていた人ですが、その先生と、京大の菱山先生の影響で、自分としては、ケネー前後に興味がずっとあったものだから、それが立教に移ってから、また復活しまして。菱山先生もスラッフア研究に携わる前後ぐらいまでは、ずっとフランスの重農学派を中心に研究され、立派な本も出されていましたから（『重農学説と「経済表」の研究』）、その影響もあるんです。立教に来てから間もなくケネー研究、現代経済学から見たケネー研究ですが、それに取り組んだんです。そのときに初めて ESHET（ヨーロッパ経済学史学会）から声が掛かって、ちょっと一回出てくれ、と。おそらくパシネッティ先生経由なんだろうが、亡くなってしまった、ミラノ大学のポルト教授から誘いがありまして、そのときに初めてポルトガルのポルトで開催された学会に出て報告しました。それ以来、ESHETの大会にはよく出席するようになりました。

平井 ポルト、私もいました。

黒木 ケネーのモデルは金額のモデルで、数量体系と価格体系が分離していないので、仮に分離してみても、つまりスラッフアタイプの投入係数を明示してみたらどういふモデルになるかというテーマで話をしたんです。マルクスのモデルとの関連で、ずっと部門間利潤率に興味があったんで、ケネーのモデルではどうなるのか、と。ケネーのモデルは周知のように部門間で剰余率が異なり、とりわけ商工業部門では剰余率がゼロのような、そういうモデルだと。じゃあ、そこに均等利潤率が成立したらどうなるかという発想でモデル化してみたら、ケネーの体系はもう根本から話が崩れるというか、農業だけに剰余が生じる、ということは必ずしもいえないといった論文を書いて、ESHETでも報告したんです。新しい試みの一つとしては、リニアプログラミングの手法を応用しました。それ以来、フランスの経済学の歴史について興味はずっと

深まりまして。ケネーの前にカンティロンという人がいるが、カンティロンのアントルブルヌールシップというか、企業家精神というアイデアは、非常に面白い。シュンペーターなども評価しているんです。それから、恥ずかしい話なんですけど、チュルゴについて、僕はケネーのいわゆるエピゴーネンというか、単なる弟子ぐらいだろうと勝手に思いこんでいて、フランス人の、前から名前だけは知っていて関心があったファッカレロと話をしたとき、つい「チュルゴは結局、ケネーの弟子筋なんですよ」と言ってしまった。そしたら「とんでもない、君」とか言われて、「もう全然ケネーやフィジオクラートとは違う。チュルゴはスミスに近いというか、スミスの先駆けなんだよ」と教えられた。

野下 ファッカレロというのはイタリア系の名前みたいに思うが。

黒木 血筋はやっぱりイタリア系みたいです。でも、フランス人ですが。とにかく「あれ？」ということで、もう一回、きちんとチュルゴの『富の形成と分配に関する諸考察』（1766年）を読み直したら、全然自分の浅はかな理解とは違って、すごい人だなと思って。極論すれば『国富論』に書いてあることを、既にチュルゴが10年前にほとんどすべて言っているじゃないかと。しかも、非常にコンパクトな中に、理論的に鋭い形でまとめられていて、すごい人だなと思って。それで、今はチュルゴ研究をやっているところです。

金融論との関わりでいうと、やっぱりちょうどその時代、18世紀の初め頃に、フランスでも中央銀行に相当するものができます。すぐに崩壊してしまうわけですが、それはジョン・ローの実験と言われるものの一環ですね。だから、今、歴史の中で興味があるのは、やっぱりローの実験と失敗の経緯。ローの紙幣発行論というか、あれは一種の内生的貨幣供給論なのか、実際は外生的な貨幣供給なのか、なぜうまくいかなかったのか、あるいは、う

まくいく可能性というのは本当にあったのかどうか。その辺はもう少し勉強したいなと思っています。今、話題の MMT 理論（現代貨幣理論）にも通じるところがあるかもしれませんね。

野下 話はマルクス経済学の現状の問題になるけれど、一番不満なのは、みんなが投機家のような行動をとるようになった現代において、いまだに実物経済の分析に固執していることにある。実物経済というのは経済の必要条件であることは確かだけれど、それだけでは経済を捉えることはできない。経済価値というもの、何らかの有用物を生み出した人間努力の社会的貢献度を市場で価値評価し価格付けすることによって生み出されるとすると、実物経済の経済量体系は、生産され市場で実現した結果の価値を集計した体系。ところが、証券価格、特に株式価格の集計量として現れる経済量は、将来の価値生産性に対する投資家による期待の表れ。その期待に基づいて価値評価したものが、証券市場で価格形成され、価値が創造される。だから、原理が全然違うわけね。あちらは結果であり、こちらは将来の期待。あえて言えば、実物商品が結果としての肉体労働の塊りとすれば、株式などの金融商品は、萌芽的な技術や経営能力というような将来の結果がどうなるかわからない精神的な労働に対する投資家の期待、価値評価を体化している。

実物商品と金融商品の違いについては、ベンサムのスミス批判がおもしろい。スミスは実物商品に体化した労働の価値だけを認めて、起業家の情熱や未完成のアイデアとかの役割、つまり、いまだ商品として実現していない人間の精神活動の意義を認めない。つまり、それら精神活動が価値を形成する可能性を一切認めなかったんだ。对象的に、ベンサムは逆に、精神活動が生産労働に先行するんだと主張してスミスを批判する。実際、17世紀から、イギリスは戦争やなにやらのために国債を大

量発行する。それに続いて、運河や道路、そして鉄道など産業革命のインフラ整備のために社債や株式も発行されてくる。その結果、そうした証券への投資から所得を得て生活する証券投資家層が大量に生まれてくる。18世紀末から19世紀初頭の産業革命期においてすでに、農業経営者でも商工業者でもでもない証券投資家という資本主体が大量に存在し、経済の運動に影響するようになった。とすると、結果としての価値だけしかないスミスの経済学というのは、将来に向けた精神活動、つまり物を作る前のアイデアとか創意、後にシュンペーターが強調するようになった企業家精神、そして、それらの精神活動を証券として商品化したうえで価値評価し資金供給する証券投資家を無視したうえで構築されたものだ。無視したというのが言い過ぎならば、過小評価した上で成立した経済学だったわけ。先ほど話が出た内田さんの『経済学の生誕』は僕も学生時代に読んで本当に感動したけれど、最近、スミスによる経済学の誕生とは、商工業者のための経済学の生誕だったと思うようになった。証券投資家の重要性を考慮したもう一つの経済学の生誕がありうるのではないかな。

黒木 資本家はいても、起業家、企業家に関わる投資行動とかは出てこないからね。

野下 新しい技術、企業を始めるとかね。

浅田 その問題は、リカードウとかマルクスにも受け継がれているよね。

黒木 古典派は、実物的なんだよ。

野下 そう。実物経済は生産された結果である有用物を市場で人々が価値評価しながら売買し、長い時間をかけて一物一価に収斂するような世界。置塩さんのあまりの成功体験のため、今もマル経は実物的世界の分析を精緻化することが至上の課題と思っているようなところがある。しかし、実物経済の世界では、利害対立や摩擦、そして様々な束縛があって、価値などの経済量の固有値は時間のか



かる試行錯誤の結果として決定される。こうした世界の作用を分析するには、労使関係や需給関係などの経済力の機械的作用原理が最も適している。もっとも、実物世界をニュートン流の遠隔作用で捉えようとする人もいるが、時間の経過をとまなう過程が見えなくなる。一方、僕が問題にしたいのは、欲望や期待、そして熱意などの商品化できない精神活動と、それを株式として商品化して売買する証券投資家の世界。精神活動とそれを価値評価する証券投資家が織りなす世界は、投資家の期待によって左右される。確定的でなく、ふわふわした不確定な世界だ。つまり、古典的なニュートン力学や解析力学ではなく、価値や変化量が不確定な量子力学的な世界だ。

浅田 それはケインズの世界なんだよ。

野下 ケインズもそうだが、もっと前、スミスと同時代のベンサムが直感した世界。そうした不確定の世界に対して、物財を作ったり運送したりする実物経済は、労働力と物的資源の工学的依存関係に支配される世界で、頭で考えただけではうまく行かない。そもそも選択行動の自由度が制約されているので、過去からの経験が重要性をもった機械的作用原理が支配する世界なんだ。僕がミンスキー派の人たちの金融不安定性仮説に馴染めないのも、彼らが、投資家の期待に支配される不確定な経済を分析対象としながら、カレツキアン・モデルの上で産業企業の資金調達行動だけに焦点を当てる点にある。だけど、今日の経済の運動は、企業内部やネット上など様々な場所で創造される人間の精神活動——実物商品の生産に用いられる労働に対して精神労働と呼んでもいいと思うが——と、それらを株式などの形で商品化して価値評価する証券投資家の行動に大きく影響されている。物財の生産にしても、証券投資家が生産プロジェクトを価値評価し、企業経営者にゴーサインを出したり、新興企業の株式に資金を投資したりすることからはじまるようになってき

た。

実は、そうした精神活動の重要性は、いまにはじまったことじゃなく、昔からあったけれど、株式市場が未発達な時代には株式や社債のように商品化されなかった。そのため、企業内部に隠蔽されて表に出てこなかっただけ。古典派においては、精神労働の役割は企業活動の暗黙の前提とされ明示的にとりあげられなかった。精神労働の役割や生産に対する先行性を経済学はあらためて発掘する必要があるんだ。

古典派的枠組みでも、銀行などの貸出や貸出利子は分析考慮できるけれど、貸出は基本的に融資企業の業績に依存するし、利子は企業収益からの控除となる。また、企業内部の精神労働の価値評価も銀行内部の主観的なもので、市場での価格形成につながらない。現代のマルクス主義も古典派の枠組みにとどまっているので、精神労働の商品化や価値評価の問題はスルーして、実物的な因果関係を精緻化することがネオクラシカルを克服できる唯一の道だと思っているようにみえる。他方、ネオクラシカルは実物商品と金融商品の違いについてはお気楽で、頭で予想したり考えたりしたことが金融商品だけでなく実物商品についてもすぐの実現できると想定する。価値論でいえば、実物商品に体化した価値はなく、金融商品に体化したポテンシャル価値だけを価値と捉え、一般均衡の枠組みを使って経済全体を分析する。実際の生産現場で期待通りにいかず工学的解決を要する障害が絶えず発生するけれど、そうしたことはネオクラシカルでは実物経済の重要な問題とされない。最適化がつねに可能だと仮定される。確かに、そうした方法によって、現代の株式市場などの動きや作用を分析できる枠組みが提供されるという面があるけれど、価値論レベルからみても理論的に不完全で正確な分析はできない。だから、置塩流の実物経済の精緻化だけがネオクラシカル克服の道じゃない。様々な

証券投資家の欲望や期待に主導されて動く現実経済をどう理論化するか、その上で、実物経済の因果関係に基づく世界とどう統合するか、そして世界を人々の役立つように改革するにはどのような政策が必要かを考えることが重要じゃないかと思う。

浅田 スラッファ自身は、そういうふわふわしたものを徹底的に排除して、あんな体系を作っちゃったわけで。

黒木 そう。だから、スラッファの中に人間というのは出てこない。それが塩沢さんなんかの読み方なんだよ。

浅田 そうしたアプローチは、リカードウやマルクスの中にもある。

野下 古典派的経済学では、株式市場を動かしている欲望とか期待とかの不確定な要因が、どんな経済的役割を担っているのかわからないし、分析できる枠組みもない。精神労働とそれを価値評価する主体の経済的意義を埋没させたまま物財生産の仕組みを考えるのが実物経済学、あるいは古典派的枠組みなんだ。

浅田 だけど、実物とそういうふわふわしたものが結び付いているのが経済であって。物を食ったり、着たりなんかというのは実物なんだよ。

野下 アリストテレスやトマス・アクィナスが人間は社会的動物だと言ったけど、人間はそれにとどまらない動物だよねえ。ガウディは役にも立たないカテドラルを造って。つまり、人間は想像し考える社会的動物であるということがまずある。

浅田 でも、あれもアイデアを実物化したから、ああいう形になった。

野下 ただ、今の日本では、ねえ。講義で、こちらが若者は欲望や情熱がなくちゃ駄目だというと、うちの学生曰く、もう去勢されました、と。結局、そういう欲望なんかも将来の展望や期待がなくちゃ湧いてこない。新規事業にしても、政府が補助金で甘やかせて引

っぱってもうまくいかない。クールジャパンのような経済産業省のプロジェクトや農業振興の官民ファンドなどのほとんどは失敗したんじゃないかなあ。

浅田 それはアニマルスピリットに働きかけようとした？

野下 アニマルスピリットの喚起なんかできたって？ やはり、リスクをとらない人たちが引っぱると、事業の価値評価が甘くなる。ボラティリティーがつきものの市場での価値評価を恐れて、政府主導で操作していることが逆にアニマルスピリットを喪失させている。単に、権力主導のプロジェクトに参加して金をもらえばよいという雰囲気醸成してしまった。

浅田 だから、アニマルスピリットは去勢されている。

黒木 そろそろ、まともに入っていきたいが、浅田さんは現代経済学という観点から見て、今の経済学教育をどう思いますか。あなたは、まだ現役でいるわけだが。物足りなさとか、いや、ある程度ちゃんとしてきて、いいんじゃないとか。

浅田 結局、エスタブリッシュされた議論というのは、やっぱり教育しないといけないと思う。つまり、異端派は格好いいというような風潮があって、既存の理論を批判したりすることが格好いいという風潮があるが、そもそも学生は何も知らないから、例えば、「正統派は駄目なんだ、なぜなら」とかいうようなこと言われたって、共感できない。学生は駄目だということを言われている正統派が何なのかを知らないんだから。つまり、自分が知らないことを批判されて、共感するわけではないよね。だから、まずは何が正統派で何が多数派なのかというのは教育した上で批判しないと、そもそも伝わらないと思うんだよ。だけど、元々学生なんて、そんな理論的なことにほとんど興味が無いから。それは僕らが学生の頃からそうですよ。いくら教育を

したって、本当言って、100教育すれば10も伝わらないね。その繰り返しだが、でも、それでもやるしかないんだが。

平井 私が一つ思うのは、進化するためには、もちろん知的な分業というのが必要だが、しかし、一つ大事なことは、研究者としてやって行きたいなら、自分が一番やりたいと思うテーマ、これを絶対に見つけなきゃ駄目ですよ。それは、先生に教えてもらったからといって得られるものでもないんです。各々違うんだが、自分はこれだと思うようなもの、これを見つける。そうすると、半ば成功とは言わないが、かなり成功で、そうすると、この問題はどういうふうに解決するかみたいなことを考えながら、いろいろ読んだりすると、ある瞬間にはっとそのテーマと何か関連するようなことが、それは一種のひらめきですよ、それが出てきたり。当然メモを取ったり、いろんなことをしながら、テーマを膨らませていく。それが多分、研究ということだと思うんです。だから、大学院生あたりで優秀な人は、そういうことを意識してやらなきゃ駄目だと思う。それが最近の若い人には若干欠けているかもしれないと思ったりすることはあります。それから、もう一つは、私なんかよりさらに前であれば、もうちょっと大まかなものの方見たいなことの教育が許されたのが、今はカリキュラムとかにしてもそうだが、シラバスが何かめっちゃくちゃ細くなっている。

黒木 そう。30回ちゃんと書けとかね。半期15回。

平井 だけど、あれ自体があまりにも画一的に細かいことを形式的に要求し過ぎているわけで、そうじゃなくて、もっと学生は大らかに物事を考えるような知的空間の余裕、これを逆に持たなきゃいけないと、私は思っているんです。

浅田 あれは結局、文科省が妙な締め付けをして、特に私立大学なんかはそれに事務室

が戦々恐々としているから。「文科省がこういうことを命令しているので、先生、こんなシラバスじゃいけないので、書き直してください」とか言って、やらされるわけですよ。あれは本当に嫌な話で。

黒木 一つは、浅田さんが言ったみたいに、批判するにしても、批判する対象がある程度きちんと分かっていると、批判することにならない、と。まともな批判ができるようにはならない。

浅田 例えば、IS・LMなんか駄目だという批判をしたい人がいても、そもそも学生はIS・LMが何のことが知りませんから。

黒木 それにしても、一般均衡理論にしたって、やっぱりある程度のフレームワークが分かっていると、それは現実とは違うじゃないかといっても、まともな批判にならないと思うんですよ。

平井 ただ、細かい専門知識だけをいっぱい身に付けても伸びない可能性があると思うのね。要するに、もう一方で、ちょっと幅広い見方をするような教育の機会みたいなのがあってもいい。例えば、哲学でも何でもいいから、考えるような時間があると、結局、細かいことをやっても、あるときに、それとここでやったことが生きてくるみたいなことがあって。今は、そういう教養教育、リベラルアーツを基本的には排除するみたいな風潮があつて。そこが問題と思うのですよ。

黒木 それは駄目なんですよ。だから、そういう意味では、例えば東大の駒場みたいな、教養部というんですか、あの存在価値は、実は非常にあると。今の時代だからこそ、私はあると思っていて、その点、我が立教では、リベラルアーツの教育を重視している。

平井 東大の教養がうまくいっていたとは思わないが、だけど理念としてはあり得る。

黒木 理念としてね。一応、立教でも、理念の粋しか出ていないかもしれないが、でも、リベラルアーツということのを非常に強く訴え

ているわけです。だから、そういう意味では、やっぱり教養の土壌というのは、専門教育をする上でも、専門馬鹿をつくらないためにも非常に重要だと思うんです。

浅田 でも、専門馬鹿というほど、みんな一生懸命、専門を勉強してるかという、誰もしていないんだが。専門馬鹿というほど、みんな真面目に専門を勉強してくれれば、今よりましだと思うが。

野下 今まで、平井さんがこんなに苦労しているとは知らなかった。慎重で真面目と思っていたから。でも何か問題意識があつて。

平井 だから、問題意識というのはすごく大事です。

野下 日本は、何でこんなに閉塞状態にあるんだろうか？ やっぱり日本社会に充満する雰囲気の問題があるんだろうね。本来は自由な精神の交流空間であるネットが、去勢された若者たちを生み出す一方で、公然たる嘘やヘイトを広め、ネガティブ情報を煽って燃え上がる。政府が情報を隠蔽したりしているので仕方ないか。

浅田 でも、1960年代、70年代が今より良かったとか面白かったとは思わない。いろんな面で今のほうがはるかにましだと思うよ。

黒木 とにかく僕の立ち位置というのは、マル経・近経を問わず、全てを疑ってかかれと。全てを疑え、と。そこから何かきっかけが開かれるというか、そういう気持ちでいつもいるんです。

浅田 マルクスが全て疑えと言ったが、自分を除いて全て疑えと。

野下 マルクス死後、彼の著作が聖書のように扱われるようになったのが問題であつて。

平井 基本的には、いろんな人の意見を一応聞いてみるみたいな、要するに、すぐに評

価するんじゃないで、一応聞いて、理解というか、客観的に見るみたいな、そういう余裕があった方がいいと思います。

黒木 だから、僕が言う、疑え、ということは、否定するということじゃないんですよ。アウフヘーベンというか。

平井 私は、知の炎みたいなもの、これがやっぱり自分の魂の中にないと、と思います。あるいは、それがあつたということは、結局、問題意識があるからということでもあります。個人の研究者としてやっていく上では、それがやっぱりとても大事だと思いますね。

その関連で一言申しますと、今回の座談会の参加者は全員、創設以来のケインズ学会の幹事なわけですが、この学会の大きなスローガンは「ケインズのスピリッツに則り」というものです。彼が行ってきた領域自体、たんなる経済学ではまったくありません。経済学、経済政策、社会哲学、経済思想、そして政治哲学、さらには数多くの国際体制の構築、福祉国家構想、哲学などなど、挙げればきりが無い領域を包摂してます。当学会では、こうした領域をすべて研究対象にするという意味で懐の深さを重視しています。これは「……主義」という主張を唱えて他の考え方を排除するという態度とは異なります。先ほどの議論の中で広範な思考経験の重要性ということが強調されていましたが、それに通じる通念をケインズ学会では重視しています。ケインズ学会の会長として、多くの若い研究者の参加を期待する次第です。

黒木 皆さん、本日は、長時間にわたる議論、本当にありがとうございました。

私の退職を記念する大変有意義な座談会になったと思います。